

氏 名	おく 奥	か 佳	や 弥
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 55 号		
学位授与の日付	平成 6 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
研 究 科・専 攻	工芸科学研究科機能科学専攻		
学 位 論 文 題 目	G. Th. リートフェルトの住宅意匠に関する研究		
審 査 委 員	(主査) 教 授 藤 本 康 雄		
	教 授 河 邊 聡 教 授 宮 島 久 雄		

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、20世紀初頭から中期にかけて活躍したオランダの建築家、ヘリット・トーマス・リートフェルト（1888～1964）の住宅作品を意匠的に分析するものであり、個々の作品に関する設計プロセスや構造、その意匠的な構成についての体系的な分析、考察を行うことによって彼の設計手法そのものを明らかにすることが意図された。

リートフェルトの設計手法の独創性は、彼が家具デザイナーとしての熟練を経た後、徐々に、しかも独学で建築設計を展開してきたことに深く関わると考える。そこで、本論ではまず、彼の初期の一連の家具を分析することから始められた。そして、それらに見いだされた〈形態の構成法〉と〈色の採用法〉は、共通する造形原理として彼の最初の独立建築、シュレーダー邸（1924）に採用されていることが考察された。

従来の箱型建築では、上下、左右、前後の3方向からの部材の直接接合によって、その隅部において、空間が完結していた。それをリートフェルトはデカルト座標接合する〈面〉を配することで、空間の閉鎖性を取り払い、隅部に停滞していた空間に流動性という生命力を与えた。それは、隅部の部材がそこで止まってしまうずに3方向に開放されていることが引き起こす、視覚的效果によるものであることが理解された。

リートフェルトの〈色〉の採用には、異なった2種類の手法があることもわかった。一つは、全体を構成する部材要素に準じて、それぞれを異なる色で塗り分けること、もう一つは単一の部材を異なる色で塗り分けることである。前者は全体の中の部分、つまり部材要素間の位置関係を顕現させ、後者は部材の物理的実体性を消滅させ、2次元的な面を視覚化する効果を持つ。それゆえ、この2種類の〈色の採用法〉は〈装飾〉ではなく、建築構成要素を明確に知覚させる〈塗り分け〉だった。さらに、前者の手法における〈色〉は、建築要素の接合状態や、機能を視覚化することに役だっていた。

リートフェルトは平面の構成においても、上記の形態の構成や色の採用に対してと同様の態度で、新たな方向性への試みに臨んだ。その一つがスライディング・パーティションによって仕切られることのできるオープン・スペースであり、「ポータブル・ハウス・コア（1929）」のスケッチに見られた、住宅のあらゆる機能を満たしながら、それらをコンパクトに納めることのできる平面構成パターンだった。また、実際に体験される内部空間を、壁厚を含まない数模ジュールにあわせようとする厳格さから、メーター・モジュールは多くの場合部屋の内のりに収められた。

本研究では、こうしたシュレーダー邸や初期の実験的住宅に見いだされたいくつかの手法を手掛かりに、従来の研究で看過されてきたシュレーダー邸以後の住宅作品群のうち、17例をその時期、特徴によって分類し、リートフェルト自身の言説や同時期の注目すべき家具デザインと照らし合わせながら、一連の住宅

作品に見られる新しい材料の採用や、形態の構成法、色の採用法の展開を明らかにした。

数あるリートフェルトの住宅群の中に、一連の流れを形成するバンガロー型住宅のうち、最初の3作品では、シュレーダー邸に比較して全体に水平性が強調された単純な立面構成と、控えめな色の採用が観察された。しかし、それぞれの機能に従って採用された色は、個々の建築構成要素を視覚化し、その相互関係を知覚させていた。そしてその立面構成は色と共働して、外壁の面体性に干渉する穴空き部分である窓や戸を独立した建築要素として視覚化し、かつ壁体の一体性が強調され、その面体構成を知覚させていた。

その後のバンガロー型住宅では、初期のシンプルな面体構成に、更にマッスの要素が編成された。それまでの白、黒、グレーの3色の構成は、材料の色の違いに置き換えられ、明るい色彩は、全体を引き締める要素として取り入れられていた。1m角の格子窓、天窗、テラスとリビングの取り合いは、同時期の住宅設計手法を代表した。そのような10年来の経験が実を結び、ファン・デン・ドール邸（1957～58）に於ては、全ての形態要素を建築全体と相互に作用させることに成功していた。

晩年のバンガロー型住宅以外の作品例では、B-2ブロックという新開発の材料を採用し、シュレーダー邸を想起させる面体構成も見られた。また、1960年前後より現われだした面体構成に組み込まれた力強い直角ラインの構成は、リートフェルトの設計した最大規模の住宅ファン・スロベ邸（1961～63）に於て、更に全体を特徴付ける形をとって完成されていた。

このようにして、1924年の最初の小さな実験住宅シュレーダー邸から1963年の大邸宅ファン・スロベ邸に至る、住宅デザインの変遷が提示され、そこに見られた〈形態〉の構成法や〈色〉の採用法は、その材料、形態、形式が置き換えられても、リートフェルトが創造しようとした基本的な色、プライマリーな空間が知覚、体験される構造、即ち、その根底に流れる意匠的な構成の原理に変わりがないことが理解された。そして、またベルリン・チェアーがシュレーダー邸、ステルトマン・チェアー（1963）がファン・スロベ邸のデザインの原理を象徴していることにおいても確かめられたように、それらの住宅デザインの独創性は、彼が家具デザインを通して学んだ、知覚を意識した造形アプローチに大きく由来していることが明らかにされた。

論文審査の結果の要旨

申請論文は、G.Th. リートフェルトについて、より広汎な視座から新たな光を当てた意欲的な研究である。著名な家具レッド&ブルーチェアーにおける、デカルト接合と呼ばれる部材架構法の展開としての住宅設計法の後づけを試み、その意匠的特性による住宅作品の適切な分類と年代の変遷過程を明らかにした。2年近くのオランダ留学の際の綿密な資料収集と調査、さらには現存住宅建物の現地見学や関係者訪問による取材を通して、可能な限り具体的事実に基づいた考察を果たしたのはもとより、オランダ語原文によるものを含む参考文献の精査も怠っていない。論旨の展開、論文の構成も適確であると認められる。リートフェルトの住宅作品をこれだけ纏めて考察し、しかもそれらの系列化の中に彼のデザイン理念の原理と発展を跡づけた研究の成果は、高く評価されてよいと考えられる。

論文内容の一部は、日本建築学会研究論文集に、既に一報は掲載され、今一報が印刷中である。よって申請論文は学位授与に値するものと認められる。